

「夢見るユメ子たち」



「六人部屋」

香川 久司

東日本大震災より早十四ヶ月もすもとうと
している。今だその大きな爪跡は残されて
いる。特に原発の近く六百kmにおよぶ膨大
な土地に住んでいた人達は放射能汚染の為
にわが町から非難し、一生帰る事さえ出来
ぬ人も多く、内心歯ざしりする思いであろ
う。それを思う時、私はまだ震災の絵を描
かねばならないのであろうと思うのです。

「望郷・fukusima」

金田 勉

3.11大震災以後、いろいろなジャンルのアーティストたちが作品を作れなくなったというのを耳にした。私はそういうことはないのだけれども、なぜか小骨の透えのように、気になってしかたががない。意を決してそのこのテーマに挑戦してみるが、こんなものを作ってもなんの支援にもならないという空しさが残る。しかし、これくらいしかできないのだからという現実を見つめ、恥じつつ出品してみる。さあ、どうだろうか？



夢見るユメ子たち

喜多 浩也

このひどい今。生きるためだけの今。そして、今「夢」が必要だ。こう想念して十数年になる。取るに足らぬ、くららぬ、ちびけな夢を見る。そして大いに元気になる。ひどい「今」を生きるしかない人たちが群れている。ちびけな夢さえも持てない人々が大勢いる。取るに足らぬ夢でも夢見ることのできる少しだけ幸せな人の像を描く。
画面に形があらわれて、画面の力学に支配されるのに反逆する為の顔が描かれる。少しだけ幸せな、夢見る顔が描かれる。
それにしても、私の絵はどこか東日本大震災のガレキの印象に似ている。

「夢見るユメ子たち」



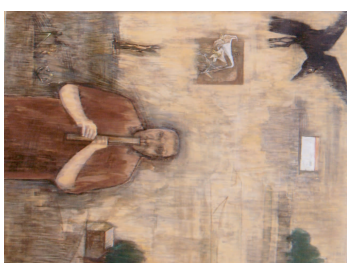
現代曼荼羅図

小林 繁和

3.11以降、何か変わって何か変わらなかつたのか、制作をしながら自問自答する毎日である。
ところで、私の住んでいる地域に巨大シヨップビングセンターの進出が決まり、建設がいよいよ始まることになった。ここに至るまでは、様々な経緯があつての

我々は第2の「フクシマ」を起こしてはならないことを、深く胸に刻み、銘記しなければならないと思う。

「地平」13回展作品



何故

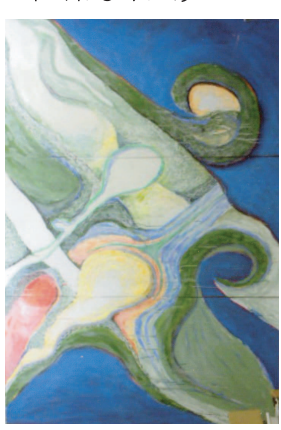
川村 圭三

かつてこの地は決戦を予想し、いく万もの兵士が最終結した。街が空襲により赤く染まる中陣地が築かれたそうだ。地中より発見された弾丸は黙して語らぬ。
あれから数十年、今もプクシマは空爆を受けている。人は何故こうした過去を繰り返すのか…。

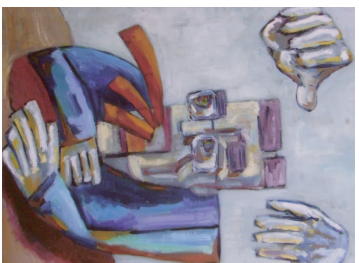
3.11で

十瀬 歌喜

3.11で描いたつもりが、思いもよらぬハズやかな色調になる。そうではない！と。では何か。考える「氷を飲む犬」はそうではなかつた。いつも問題は沢山あるのにこの乖離！表面と裏面がこの“切断”を私に迫つた。何とも、何を！それがいつも迷う。



「3.11(途中)」



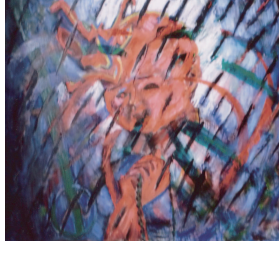
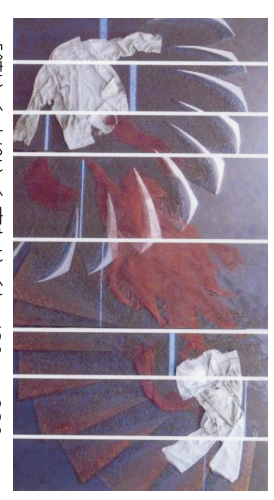
杉山 まさし

高レベルの放射性廃棄物は、結局は、地中深く埋められ手がないのか。今ある原発を順次廃炉にして、そこから出される廃棄物、年月、費用と、遠方もない。埋めるにしても、地震大国で活断層が走る国土の狭い日本の、一体どこに埋めるといいのか。地球上で唯一の最終処分場、フレンチソフの「オンカロ」では、その期間を10万年としている。第二次世界大戦後、たった十年の平和さえ保ち得なかつた人類が、何を担保にその期間を保証するといふのか。もはやこれは喜劇だ。

渦巻く不安

坪井功次

高度成長期、若い職工たちは一國一城の主人を夢見て、小さいながらも工場を立ち上げた。仕事に自信と誇りを持つていた。何らかの不況の波にも努力・工夫・技術力で乗り切つて来た。しかし、大手企業は、世界市場、国



しい、女は情知意する。人類は二十世の侵略戦争が席巻ることはなかつた。垂直思考が強い。水平思考が理解しに組み込まなけれ

鎮魂



「地の再生」

未来を生きられなかつた多くの命に、自然の理られない。今回の作品には犠牲者への鎮魂の思現できたかどうか。

投げつけた



タイトルの実が、ただ今の大され、絆の言葉にされている。かげんな原発事となれどとならない、コンクリートの壁に向つて闘え！

萩原 隆明

最近抽象的な画面の中に具象らしきものを小物として配置する方法をとつている。仏像や石仏などがその主役となる。キャンバスと対峙するが、仕上がり図など全く想定していない。絵の具を無造作に塗る。キャンバスを上下逆さまにしてみる。利き腕の癖が薄れて妙に新鮮を感じる。又塗る。氣にいつたフォルムが見つかるまで繰り返す。後は小物達や主役の構成に思考を尖らせ、終わりのない苦悩の時を費やす。

